



能登町長  
持本 一茂

新年あけましておめでとうございませう。能登町の皆さまには、健やかに新春を迎えられたことをお喜び申し上げます。

町は、平成18年から3年間を「集中財政改革期間」としてすべての事務事業を見直し、町債発行の抑制を図るなどの施策を行なうて参りました。その結果、平成20年度予算は、財政健全化への光明が見え始めたものとなりました。

しかし、依然として特別会計を含めた財政状況は良い水準にはなく、さらなる健全化が求められています。さらに世界的な金融危機の影響は、一部能登町でもその影響が現れ始めており、今後も緊張の糸を緩めることは許されません。

さて、昨年は金沢市の民間企業が能登町へ農業参入して、初めての収穫を得ました。能登で

育った作物が、いよいよ消費者

の元へ届けられる運びとなったのはこの上ない喜びであり、能登町の基幹産業の一つである農業の振興と雇用の促進が期待されております。また、7月には奥能登に伝わる農耕神事「アエノコト」が、ユネスコの無形文化遺産日本代表の提案候補となりました。農業に関するうれしい話題が続ぎ、先人が大切にしていた収穫への感謝の気持ちをより深いものにいたしました。

また、9月にJPTA能登国際女子オープンテニス、10月には大相撲能登場所という、2つの大きなスポーツイベントが開催され、両大会とも盛況のうちに幕を閉じました。いずれの大会も、実行委員会の皆さまの熱意と努力によって大成功に導かれたものと思っております。会場に足を運んでいただいた皆さまの歓

声と喜びの表情を拝見しまして、何事にも代えがたい、爽快な気持ちがありました。平成17年3月の能登町誕生以来、町民の皆さまには、多大なご心配をお掛けし、ご協力をいただきながらこれまで参りましたが、町を元気にできるのは、町民の皆さまであることを確信いたしております。

今後は、平成21年度予算の策定に向け全力を尽くし、能登町の未来へ向けての礎をより強固なものにしたいと考えております。まちづくりの主役である町民の皆さまと共に、町の伝統を守り、新しい能登町の未来を考えていけるよう、環境の整備に努める所存です。

最後に、本年が皆さまにとりまして、素晴らしい年になることをご祈念申し上げます。新年のご挨拶といたします。



能登町議会議長  
山崎 元英

新年あけましておめでとうございませう。

町民の皆さまには、健やかに新春をお迎えのことと心からお喜び申し上げますとともに、日ごろから町政の推進にご理解とご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

平成20年の世相を表現する漢字は「変」でした。まさに政治では「変革」の声が高まり、経済ではアメリカの金融危機を端とする「激変」の波が襲っています。

このことが百年に一度といわれる国内景気の急激な後退、企業の破たんや雇用の悪化など大きな社会問題となり、国民に将来の不安を抱かせることは明確です。

現在、国や地方自治体を取り巻く環境は大変厳しいものがあります。そのような状況のもと、

地方交付税、補助金、税源移譲を三位一体として国が進める改

革は市町村行財政の抜本的な改革を促し、地方自治体の自立を強く求めています。税財源を多く持たず、財政的にも厳しい現状にある当町にとっては、過酷な試練が続くことと思っております。何としてもこの難局を乗り越えて行かなければなりません。

そのためには住民の代表機関として議会議員自らが問題意識と政策立案能力を高め、町民の皆さまや行政機関と協働の理念のもと、町の将来像である「ひと、くらしが輝くふれあいのまち」を目指して努力する所存であります。

さて、能登町が平成17年3月に発足以来やがて4年を経過しようとしています。町民の福祉向上を最大目標として町づくりが行われてきましたが、町を取

り巻く社会情勢は、なお厳しいものがあります。少子高齢化と人口減少は止まず、医療や雇用についても不安が増大しているように思います。町民のニーズは今後ますます多様化することでしょう。それに応えるためには財政の健全化を図ることが不可欠、急務であり、より一層の努力が必要です。

議会改革を求める声にも応えなければなりません。懸案であります議員倫理に関すること、定数や議会庁舎のことなど、誠実に検討を進めなければなりません。

多くの課題を解決するために町民の皆さまの深いご理解とご協力をお願いし、本年も皆さまにとつて最良の年となりますよう心からご祈念申し上げます。新年のご挨拶といたします。

3

# 謹賀新年



# アエノコトが伝えるもの



ユネスコ無形文化遺産（世界無形文化遺産）登録候補となった今年のアエノコト実演には全国からたくさんの人が見学に訪れた。

「今」日はアエノコトでございます。長い間、お寒い中、ご苦労さまでございました」

12月5日は『暮れのアエノコト』。田の神を田んぼから迎える「田の神迎え」が行われる。

神事を執り行う田中登さん（63歳） 小間生は続ける。

「これから家の方にご案内申し上げます。どうぞごゆっくりお上がりくださいませ」

田中さんは田の神の依代である榊を田んぼに立て、くわを3回打って稲株を起す。

「ここは坂になっております。道中はつまづかないようごゆっくりお進みくださいませ」

田の神は夫婦神で、目が不自由だと信じられている。田んぼを守り、働き続けて疲れのため

に失明したとも、稲穂で目を傷つけて片目になったともいわれている。

「ここは階段になっております」

田中さんはゆっくりと田の神を家に案内し、敷居をまたぐ。

「田の神様がおいでになったぞ」

玄関では家族が迎え、用意してある桶で神の泥を落とす。田の神はいろいろのそばに案内され

暖をとる。

「今年4月10日より田打ちが始まり、5月10日より田植えが

始まりました。その間、日照りがあり、雨も降り、病気や害虫も発生しましたけれども、9月の終わりころには刈り取りが終わり、おかげさまでたくさんのお米が取れ、感謝申し上げます」

「ここでは、これよりお風呂の方へご案内申し上げます」

豊作に感謝した田中さんは、田の神を風呂に案内する。

「お風呂の湯加減はいかがでございますでしょうか。熱ければお水もたくさんございます。ぬるければまきもたくさんございますのでごゆっくりお入りくださいませ」

田の神の背中を流し、いろいろに戻った田中さんは、御膳を確認し、田の神を座敷に案内する。

「今日の料理は、家内の者が精魂込めて作った料理ばかりですので、ごゆっくりと腹一杯お召し上がりくださいませ」

田中さんは目の不自由な田の神に料理を一品一品説明する。

「今日の料理は、小豆飯を山盛りにしてございます。汁物は納豆汁でございます。平のものは椎茸、大根、人参、里芋などたくさん用意してございます。お刺身はブリの刺身でございます。お頭はハチメでございます。それではお神酒もたくさんございますのでお注ぎいたします」

お神酒を注ぎ、しばらく田の神の食事を待ったあと、大好物といわれる甘酒を勧める。

「今年の甘酒も大変甘く仕上がっておりますのでお飲みくださいませ」

「今年の料理の味はいかがでございますでしょうか。また、腹一杯お召しなりましたでしょうか。それでは御膳を引かせていただきます」

料理はすべて家族で分け合おう。昔の人にとってはアエノコトの日がごちそうを食べられる楽しみの日でもあったという。

これは柳田植物公園合鹿庵で実演されたアエノコトの一部。神事には決まった形式はなく、家々で異なる。大切なことは形式ではなく『心』。もてなしと感謝を忘れない能登人の『心』。



右\_3回くわを入れて稲株を起す。田の神は稲作だけでなく、夫婦の神、山の神、家の神を習合し、畑作も守っている。  
左\_田の神を家の中に案内する田中さん。この日から2月9日まで田の神は家の中で厳しい冬を家族と過ごす。



アエノコトの「アエ」は饗応（きょうおう、ごちそう）をしてもてなすの意味、「コト」は「事」とも書かれ、家庭の祭りを意味する。古くから各家庭に伝わる祭事のため、形式は一定しておらず、ゴテ（世帯主）の采配で神事が行われる。



# そのすべてには理由がある。

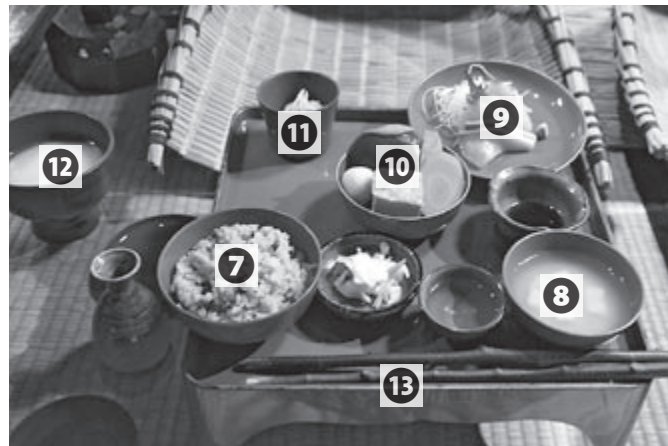
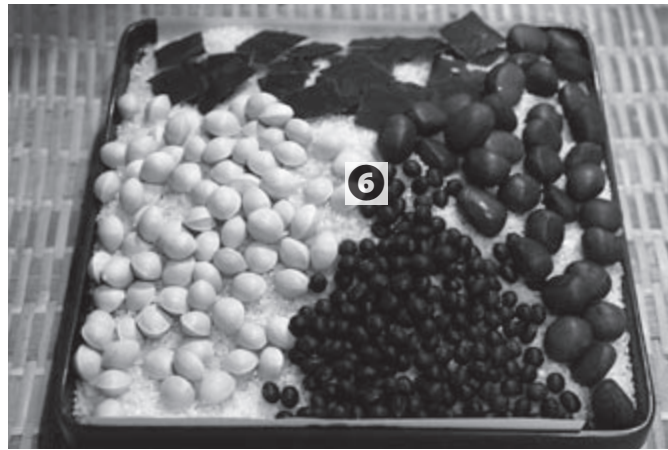


【3尾頭付きのハチメ】ハチメの尾頭付きを生魚で用意する。焼き魚は「田が焼けて水が枯れる」ということで縁起が悪いとされる。ハチメは口が大きい魚であり、収穫される米粒が大きくなるようにという意味がある。

【4二股(ふたまた)大根】葉が付いたままの二股大根を2本供える。二股大根は人の形を表しており、子孫繁栄の願いが込められている。

【5鏡もち、干し柿】縁起物という意味と収穫を感謝するお供えという意味がある。

【6収穫の幸】一升杓に米を1升2合盛り、海の幸や山の幸を飾って1年の収穫を報告し感謝する。ここではギンナン、3芋四方に切った昆布、クリ、黒豆が供えられている。木の実が多い理由は、稲作文化が始まる前の縄文時代から保存食としていた食料だからではないかという説もある。農具である一斗箕(いっとうみ)の上に用意される。



【7小豆飯】ご飯は小豆飯を大盛りにする。赤飯の場合もあるが、「米を蒸す」ため、稲作には縁起が悪いと考えられている。

【8納豆汁】汁物は納豆汁。納豆には、粘り強く一生懸命仕事をするという意味がある。

【9刺身】刺身はブリを使う。ブリは出世魚であり、縁起もの。

【10平椀盛り】煮しめは大根、ニンジン、ゴボウ、里芋、シイタケ、豆腐、フキなど7品か9品。その年に家の畑で収穫された野菜を使い感謝する。

【11酢の物】大根とブリの酢の物を用意する。

【12甘酒】田の神の好物とされる甘酒。米から作るため収穫に感謝するという意味と、土地の境界を甘く見てほしい(年貢が少なくなる)という意味もある。

【13クリのはし】クリの木は実が採れるので豊作になるようにという願いを込める。長さは1尺2寸で12カ月を表している。



【1種籾俵】種籾は農家にとっては命綱。白い布の上に大黒積みし、サカキ(家が栄えるという意味もある)を飾ることで、田の神に種籾俵で休んでもらう。大切な種籾を春まで守ってもらうために。



【2煮しめ、小豆飯、甘酒のおかわり分】田の神におなか一杯食べてもらおうと料理はたくさん用意する。食料が豊富ではなかった昔は、料理をたくさん用意することが精いっぱいのもてなしだった。

農業の近代化、後継者不足という流れの中でアエノコトも簡略化したり、途絶えた農家も多い。なぜアエノコトが奥能登だけに伝承されてきたのか、その意味を調べることで見えてくる。





# アエノコトが伝えるもの

現在、能登町で本格的にアエノコト神事を行っている家庭は少ない。だからこそ合鹿庵で毎年実演されるアエノコトは、保存・継承という面で極めて重要な役割を担っている。

アエノコトが世界無形遺産に登録される予定の2009年。アエノコトが現代のわたしたちに伝えるものは何なのか、あらためて考えるために執行者の田中登さんに話を聞いた。

## 田中家のアエノコト

わたしの家では、先祖代々アエノコトを守ってきました。父親がやっていたのを子どものころからずっと見てきて、子ども心に「変なことやってるなあ」とか「本当に田の神様はいるのかなあ」と思ってお風呂上りの足跡を調べたりもしていましたね。当時は食べ物も豊富ではなかった時代、年に2回のアエノコトの日がごちそうを食べられる日でした。父親がやっていた30年くらい前から取材が来た



きもてなします。夫婦ゲンカをして、隣の家に入れない田の神様を招いたそうですが、アエノコトを大切にしていた梅さんの家から有名な写真家が生まれたことは不思議なことですね。

## 田の神様が伝えるもの

アエノコトは稲作だけではなく、畑や山の恵み、海の恵みを

## 食に感謝する心、人を思いやる心を感じてほしい。

り、観光バスで大勢の人が見学に来たこともありました。

## 意味も知らずに始まった

合鹿庵でアエノコトの実演が始まったのは今からちょうど20年前。当時アエノコトを研究していた原田正彰先生（故人）が移築した年から始めたのです。

最初の2年間アエノコトを執行していた人が病気になる、原田先生は後任を探してしました。それで「父親がやっていたから息子もできるだろう」ということで依頼が来りました。

父親のアエノコトを見てきたわたしは、やり方自体は自然に覚えていました。でもアエノコトは人に見せるものではなく、それぞれの家でやるものだと考えていたので最初は抵抗もありました。

初めのころは、見物する人も20人くらいで、ほかに学校の子どもたちが課外授業でよく見学に来てくれていました。ところが実演したあと質問を受けても答えられないことに気がきました。やり方は知っていても、その意味が分かっていたいなかったのです。父親も原田先生も亡くなっていたので、それからはい

ろいろな人に聞いたり、文献を読んだりして勉強しました。

## 意味が分かってくると、下手

なことを言ってしまうので、笑われないよう、今まで以上に動作や話し方に気を使うようになりました。

## 家々で違うことが魅力

アエノコトは奥能登全域に伝わっていますが、特に盛んに行われていたのが町野川沿いです。神野、柳田、町野などですが、この地域には真言宗のお寺が多いのです。お寺でもアエノコトをやっていましたし、真言宗の修験者たちがアエノコトを大切に守り、伝えてきたのです。

もちろんほかの宗派でもアエノコトはやっていますが、例えば浄土真宗の家では、昔から簡略化されていることが多いと思います。

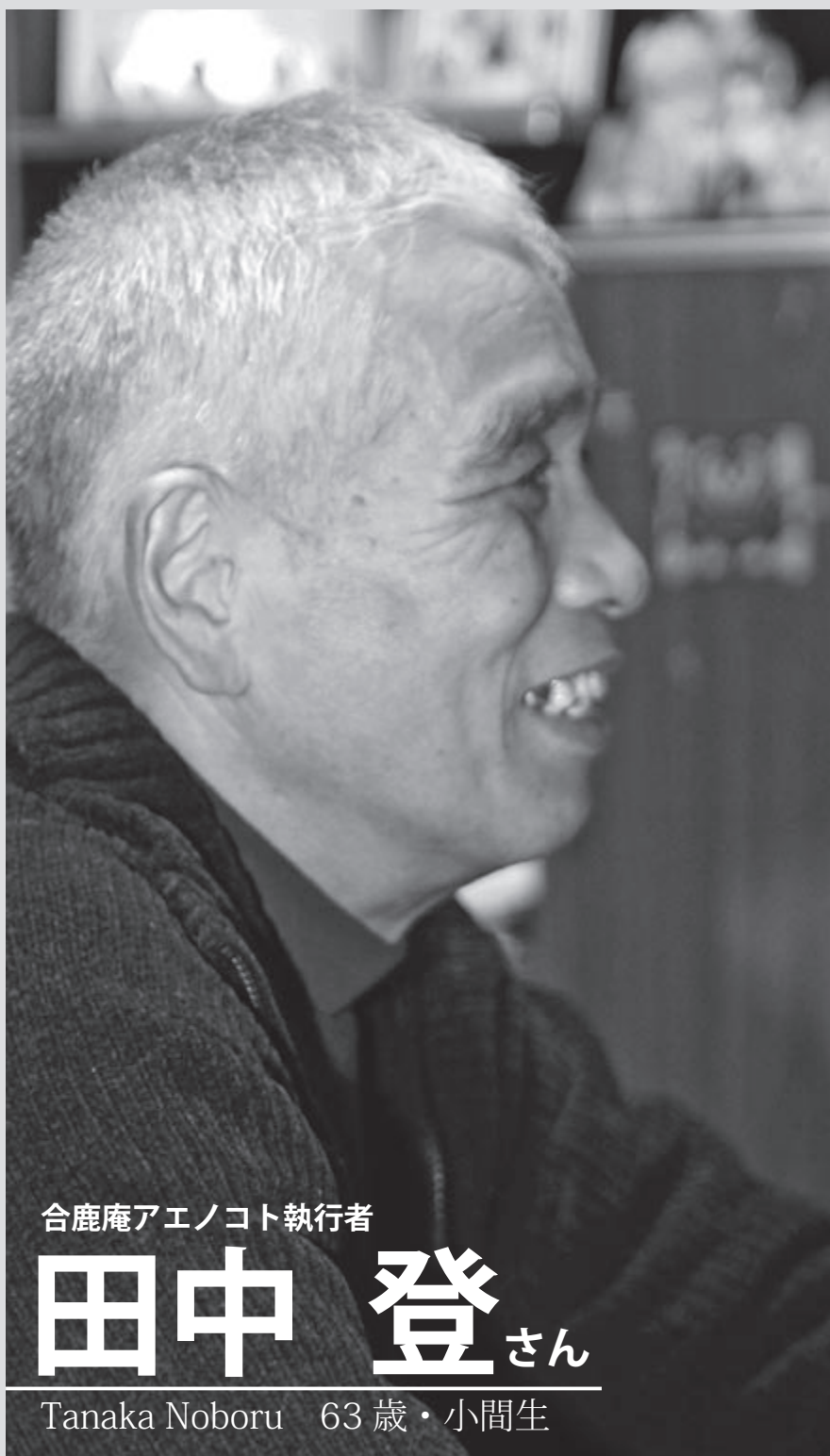
アエノコトにはこれをしてはいけないという決まりはありません。それぞれの家が代々守ってきたことを続けることが大切なのです。田の神様も家によって違います。盲目の場合もあれば、片目の場合もあります。十郎原の梅さんの家では御膳を三つ並べ、3人の田の神様を招

供え、すべてを田の神様に感謝することで家の繁栄を願います。そして目に見えない神様を扱う節度は、相手に対する思いやりを表します。

わたしが今、アエノコトの実演で皆さんに一番伝えたいことは、「食の大切さ」と「人への思いやりの心」です。これからもアエノコトを通じて伝えていきたいと思っています。

国指定文化財となった30年前は、柳田だけでも何百件という農家がアエノコトをしていましたが、現在は数えるほどにまで激減しています。

奥能登の農家で先祖代々伝わってきたアエノコトというすばらしい伝統を、文化財としていかに残していくかということが、今後の課題なのではないでしょうか。



合鹿庵アエノコト執行者

# 田中 登さん

Tanaka Noboru 63歳・小間生

「アエノコトを地域の力で復活させたい」

昨年12月、世界無形遺産登録候補をきっかけとして、国重地区の有志が集まった。地区での話し合いを重ね、アエノコトを執行した吉村安弘さん（国重町内会長）に話を聞いた。



## 実現へのいきさつは。

国重地区は現在、19戸49人が暮らす地域です。今回、地区としてアエノコト神事を行うきっかけとなったのは、ユネスコへの登録推薦という話題を耳にしたことでした。その後、有志が意見を出し合う機会を設け、実現へとこぎつきました。

## 準備で苦労した点などは。

わたしには10歳のころに家族でごちそうを食べたという記憶しかありませんでした。資料や写真を集め、地域の皆さんの昔の記憶をたどりながら準備が進

められてきました。

それぞれのお宅で神事の方法が違うので、現代の国重地区に合わせた形になるよう相談してきました。料理は町内のお母さんたちに作ってもらい、甘酒は懐かしい味わいに仕上がっていて、遠い記憶が蘇りました。

初めてのことで、不安もありましたが無事に終えることができました。当日は、仕事を終えた地域の人たちも足を運んでくださり、思い出話に花を咲かせました。

## 神事を終えて感じたことは。

国重地区では現在でも2軒のお宅で神事を続けています。能登は自然を敬う心が強い地域で、能登の人は自然界のすべてに感謝する心を持っています。これからも地域の活動を通して感謝する心を伝えていくことができればと思っています。



築140年の自宅で田の神をもてなす吉村さん。地域の人に見守られ、半世紀ぶりの神事となった。